

博多遺跡群店屋町工区一七五号土坑の再検討

―元弘三年・菊池一族埋葬推定地をめぐって―

楠瀬慶太

はじめに

福岡市の博多遺跡群店屋町工区D区の発掘調査で見つかった火葬頭骨集積遺構と一七五号土坑は、多数の刀傷を持つ焼け焦げた百体以上の頭骨と首なし人骨がまとまって集められた遺構として注目されている（折尾ほか一九八六）。京都・東福寺の僧・良覚の記録『博

多日記』の記述や遺構の立地、人骨学的な分析から、元弘三年（一三三三）三月、後醍醐天皇に呼応した菊池家十二代・武時ら一族が博多の鎮西探題を襲撃して敗れ、処刑された一族の首級が集められて焼かれた遺構と推測されている（折尾ほか一九八六、永井一九八六、富岡ほか二〇一七）。なお、『博多日記』には菊池一族二百人が処刑され首を切られたことは書かれているが、記述が途中までで遺体や骨を集めて供養や埋葬を行ったという記述はない。

火葬頭骨集積遺構では出土遺物は報告されていないが、一七五号土坑では土師器皿・杯各1点と土師質の火舎香炉1点が出土遺物として図示されている。また、未報告資料には焼け焦げたタール状の黒色物質（人間の油か）がこびりついた土師器皿・杯が数十点出土し、完全な共伴遺物ではないが、遺構から陶磁器類も出土している。

筆者は二〇〇六年にこれら未報告資料を実見し、その形態や特徴、遺構の検出状況、人骨の分析結果などから元弘三年の菊池一族処刑に関する遺構に伴う実年代資料として矛盾がないと判断し、博多遺跡群の土師器の編年研究に使用した（楠瀬二〇〇七）。

当時は資料を軽く実見したのみで詳しく調査、検討しなかったが、タール状の黒色物質がこびりついた完形の土師器などは副葬品の可能性があり、処刑された菊池一族の遺体が供養後に埋葬されたことを示唆する遺物である。また、謀反人として処刑され、首級を晒された菊池武時だが、福岡市内には武時を吊った史跡も多数残されている（桃崎二〇一三）。こうした史跡も、後代に武時がどのように福岡の人々に捉えられたかを考える意味で重要なものである。

本稿では、まず人骨とともに出土した未報告の土師器類を再調査し、実測図とともに報告し、実年代資料としての位置付けを再確認する。続いて、一七五号土坑の埋葬地としての立地や土師器以外の共伴遺物、『博多日記』の記述等を再検討することで、菊池一族が供養・埋葬された可能性を探ってみたい。

一、研究史と研究の視点

元弘三年の菊池一族処刑に関わる研究史を再検討し、研究の視点を整理する。

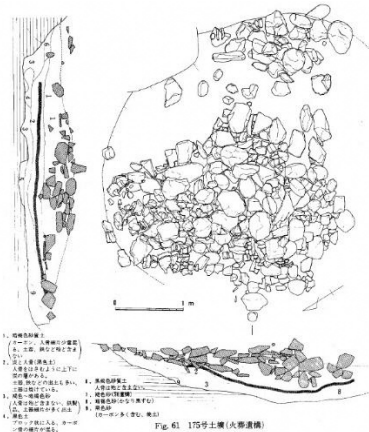
(一) 遺構と人骨の分析

一七五号土坑・火葬頭骨集積遺構については、永井昌文氏、折尾学氏、富岡直人氏らが人骨や遺構の分析から、菊池一族の処刑に伴うものと推定している。まず、調査報告書（折尾ほか一九八六）や富岡氏らの整理（富岡ほか二〇一七）から遺構の検出状況を確認する。

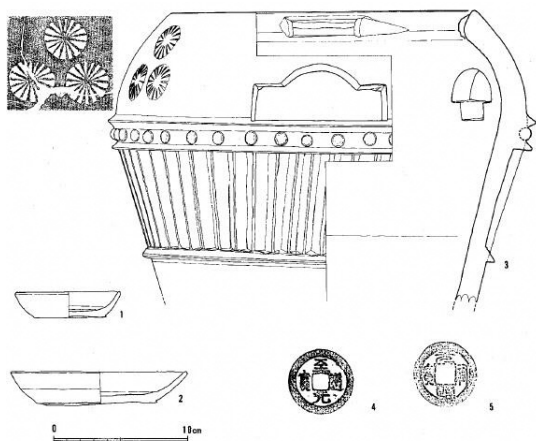
DⅠ区の火葬頭骨集積遺構は、溝状遺構で幅約一〇〇cm、長さ約二八〇cm、深さ約三〇cmにわたって頭骨と頸椎が多数焼かれた状態で散在していた。遺構は一四世紀前半に廃絶されたとみられる八号溝の上部にあり、廃絶直後の浅いくぼみを利用して作られている。またDⅡa・b区で確認された一七五号土坑は、直径四mの円形土坑で、床面の砂は赤く焼けてその上の木炭を多量に含む層に焼かれた頭蓋骨以外の人骨を含む層がある。遺体に伴う脂肪がタ



第1図 火葬頭骨集積遺構



第2図 一七五号土坑遺構実測図



第3図 一七五号土坑出土遺物

持ち込まれ、骨が燃焼されたと考えられる」「埋存状況は、焼成後に土がかかれ、土中に埋納されたことをうかがわせる」と推定。同時期に形成されたと推定される隣接遺構の共伴遺物から頭骨集積遺構を一四世紀前半と推定している。一七五号土坑では、新たに資料から一点後頭

ル状になって砂を固めている。最上部に五〇cm大の大石や礫が置かれている。火葬後の覆土には多くの遺物が確認されているが、火葬時の層から出土した遺物は「土師器皿類と鉄釘等」「土師小皿と杯、土師質の火舎」でいずれも表面が火熱で焼け、タール状付着物がある。報告書では、斬首後の頭以外の遺体が肉付きの状態で見つかったと推測するが、遺物の副葬品としての可能性には言及していない（折尾ほか一九八六、折尾一九八八）。富岡氏らは調査資料を再検討し、頭骨に多く見られる刀創の特徴から、戦闘または処刑により斬首された遺体が複数見られることを指摘し、『博多日記』に見られる菊池一族処刑の記述との符号を指摘した永井氏の分析（永井一九八六）を肯定した。頭骨集積遺構は「底面に二〇cm前後の扁平な石を敷き、その上に薪と首級を置いて燃焼させた」「焼成時には非常に多量の燃料が遺構に持ち込まれ、骨が燃焼されたと考えられる」「埋存状況は、焼成後に土がかかれ、土中に埋納されたことをうかがわせる」と推定。同時期に形成されたと推定される隣接遺構の共伴遺物から頭骨集積遺構を一四世紀前半と推定している。一七五号土坑では、新たに資料から一点後頭

部破片が確認されたが、炭化物を多く伴う火葬遺構であり、斬首後の胴部の処理を専ら行つた遺構として位置付けている。また、人骨は大部分が成人であるが、その中に未成年や幼児の骨が含まれることも指摘している（富岡ほか二〇一七）。

研究史から二つの遺構は、いずれも火葬を伴う一四世紀の埋葬遺構であり、『博多日記』の菊池一族処刑の記述との整合性が指摘されている。ただし、遺構出土遺物の検討は不十分で、未報告資料を含めた遺物の分析が、火葬や埋葬の状況を探る材料となりそうである。

（二）『博多日記』の記述と遺構の立地

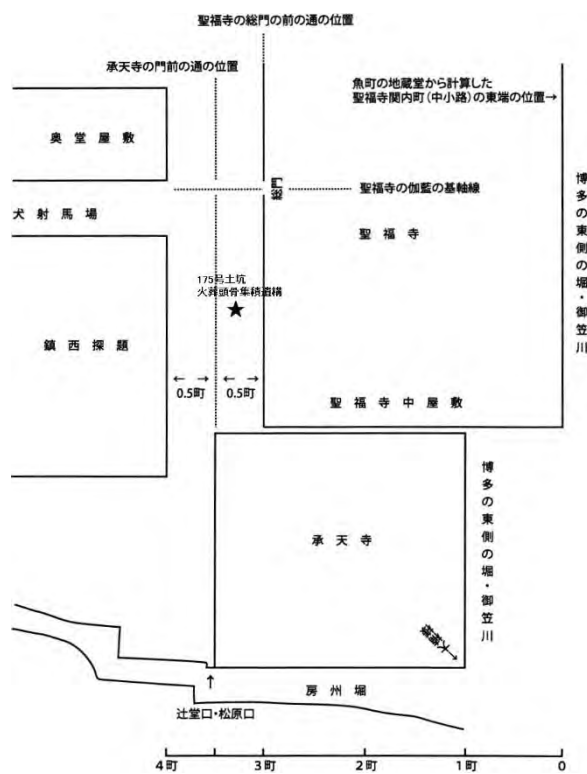
次に『博多日記』の菊池一族処刑に関わる記載を詳しく確認しておく。『博多日記』は、嘉暦四年（一二三二）に博多の承天寺に寄宿していた京都・東福寺の僧・良覚が書いた「東福寺領肥前国彼杵荘文書目録」の裏書きの年代風記録である。日記と目録の年代は異なるが、筆跡が同一であることから作者は良覚であると考えられている（川添一九六六）。『博多日記』の史料的位置付けについて分析した森茂暁氏は、良覚が体制側（鎌倉幕府側）の立場で、任務や職務をとおして鎮西探題や九州各国の守護を兼ねる引付頭人と日常的に交流していたと指摘する。そのため、記述は鎮西探題からの情報を元に記された可能性がある。また、日記は菊池合戦に始まる元弘の乱の推移と地方の動向を東福寺に報告する目的で作成されたと推測。記述の類似性から軍記物語『太平記』の素材の一つになった可能性も指摘し、菊池氏挙兵と処刑までの状況が追える同時代史料として使用できることを示唆している（森二〇〇六）。

菊池一族処刑に関して『博多日記』は「サテ合戦過テ筑州江州以下鎮西人々被参御所、即菊池入道子息三郎寂阿舍弟覚勝頸以下若党

等頸被懸犬射馬場、寂阿三郎覚勝三人力頸ハ、始四五日ハ不被懸、後ニ被懸之、寂阿並子息三郎覚勝頸ハ、別ニ被懸之、夜ハ取テ被置御所、十ヶ日計アリテ、以釘被打付、札銘ニ云、謀叛人等頸事、菊池二郎入道寂阿、子息三郎、寂阿舍弟二郎入道覚勝云々、菊池方手負人等落行之處、國々ヨリ博多ニ馳上ル勢共行向討取之、頸ヲ取進之間、大射馬場ニ三重ニ被懸之、五所ニ木ヲユイワタシテ被懸、其後亦連々ニ自所々取進落人頸二百餘也」と記している。

元弘三年三月一三日、鎮西探題に攻め込み討ち取られた菊池武時（寂阿）ら一族七十人あまりは処刑され、すぐに鎮西探題側にあつたとされる「犬射馬場」に首がさらされた。武時ら武将の首には「謀叛人等頸事」などと札銘で名前が記されていた。木と木の間に紐をかけた五ヶ所に首が懸けられ、各所から送られてきた一族の落人の首二〇〇余がさらされたことが記されている。記述は四月初旬までしか残されておらず、いつ火葬などの首級や胴体の処理が行われたかは不明である。

折尾氏は、『博多日記』の記述と一七五号土坑・頭骨集積遺構を対象化し、①一族の首が懸けられた犬射馬場は現在の馬場新町と考えられ、出土地点と隣接している②懸けられた首二〇〇余と出土首級一一〇体は相違するが、後世の削平も考慮すれば妥当③武時の孫や若党も討ち取られており、出土首級に未成人が含まれても不自然ではない④出土首級が火葬されたのは寺院の多い博多では当然の弔い作業であつた⑤合戦の跡の刀創も出土首級に刻まれている⑥討ち入りと遺物の年代観が一致する⑦五月二五日に鎮西探題が滅ぼされており北条氏の首級の可能性がある―などと指摘して、菊池一族の埋葬地として推定している（折尾一九八八）。



遺構の立地について、『博多日記』の記述から博多の都市を復元した大庭康時氏は、菊池一族の首級と断定する根拠はないとしながらも、遺構は茶毘や火葬が行われた点から見て屋敷地内や町屋の一角でなく、開放的な空き地であつたと推測する(第4図)。さらし首が市で行われる場合も多いことから、博多の犬射馬場も市が立つ空き地であつた可能性を指摘している(大庭二〇一九)。

また、佐藤鉄太郎氏も『博多日記』などから都市景観を復元している(佐藤二〇〇九)。鎮西探題館については、博多遺跡群の発掘調査から、北条氏の家紋である三鱗紋が刻まれた土製円盤や鎌倉的志向のえられる青磁香炉が出土している一七二次調査区と七九次調査区が有力視されており、聖福寺と鎮西探題の間に一七五号土坑と火葬頭骨集積遺構は立地することになる(図5)。

研究史や発掘成果から、一七五号土坑と火葬頭骨集積遺構は鎮西探題と隣接し、人骨の分析からも明らかにになった特殊な状況から一四世紀前半という鎌倉末期の戦乱に伴うものである可能性が高い。現状菊池一族と断定する明確な根拠は確認されていないが、遺構の立地や出土状況は、『博多日記』記載の菊池合戦や元弘の乱に伴う遺構と推測される大きな根拠となっている。

一方で、遺構を菊池一族埋葬地と仮定した場合の『博多日記』の遺体処理に関する記載の詳細な検討は行われておらず、三月・四月の記載をもう一度見直して読み解いてみる必要がある。また、火葬による人骨処理遺構が偶発的に発生したものなのか、大庭氏が指摘したような周辺の場所性によるものなのかも検討の余地があると考

える。

(三) 研究の視点

先行研究はいずれも遺構の検出状況や文献記載との整合性が埋葬地推定の根拠であり、考古学の年代決定の基礎的な方法論である遺物の検証や都市博多全体での遺構の位置付けがほとんど行われていない。本稿では、まず一七五号土坑がある店屋町工区の都市博多内での埋葬地としての立地に着目する。博多遺跡群内での墓や石塔などの埋葬遺構の時期別分布を検証し、なぜ店屋町工区が大量の人骨の埋葬地として選ばれたのかを考えてみたい。次に博多遺跡群全域で出土した土師器の分類編年研究(楠瀬二〇〇七)をもとに、改めて考古学的な共伴遺物の年代の再検証を行う。未報告資料を分析することで、遺構の年代観や遺物(副葬品)と供養の関係を検証する。また、『博多日記』の記載を分析することで、遺構が菊池一族埋葬地である可能性や供養の有無の検証を補強してみたい。

二、埋葬地としての聖福寺門前

一七五号土坑と火葬頭骨集積遺構が検出された店屋町工区は、鎮西探題館と聖福寺の間にある。どちらかというと聖福寺に近く、その門前という立地である。当地が一四世紀前半に埋葬地となった背景を、都市博多内の埋葬遺構分布の変遷から探ってみたい(一)。

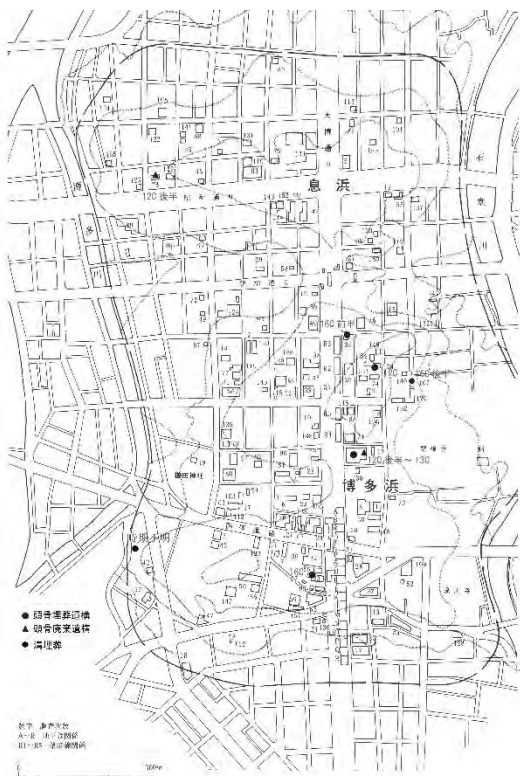
(一) 頭骨埋葬遺構

『博多日記』には、菊池一族が首を切られ、犬射馬場にさらされたことは書かれているが、記述は途中で終わっており、埋葬地がどこなのかは分からない。二〇〇体に登る首級や胴体を都市外に運んだとは考えがたく、都市内で処理されたと考えられる。博多遺跡群

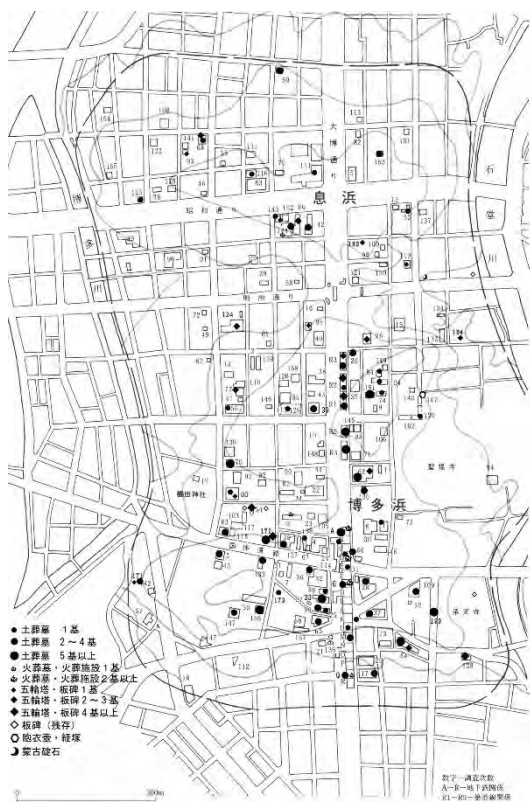
内に店屋町工区以外に人骨の大量埋葬遺構がないかまず確認する。遺跡群内に少数の頭骨が出土した遺構は八件検出されているが(第6図)、集積遺構以外に多数の頭骨を伴うものは確認されていない。多数の胴体と頭骨が近場にあるのは店屋町工区のみであり、ここが菊池一族埋葬地として推定できる唯一の遺構である。

(二) 埋葬遺構の分布と変遷

次に古代・中世の埋葬遺構の分布(第7図)を見る。人骨や副葬品が共伴し墓と認定された遺構、形状などから墓と推定された遺構、五輪塔などの供養塔も含めて約三〇〇件が確認されている。分布は散在傾向にあるが、中世後期に発展する北側の息浜(沖浜)に比べて、古代から拠点となった南側の博多浜に多く遺構が分布している。大庭氏の整理によると、都市博多では中世前期は古代からの伝統を引く土坑墓・木棺墓が主流だが、一三世紀に入ると急速に廃れ始



第6図 博多遺跡群頭骨出土遺構



第7図 古代・中世の埋葬遺構の分布

める。土坑墓・木棺墓はそれ以降あまり見られなくなり、一四世紀前半頃に遺跡群の一角に石塔群や火葬墓・火葬施設が集中的に営まれ、それ以降は都市内に墓が営まれることはほとんどなくなるという。都市内の石塔群も骨を納めない「詣り墓」であり、この時期に墓が都市外に出されたことを指摘している（大庭一九九二a・b、一九九六、二〇〇一、二〇〇二）。

また、大庭氏は、中世前期の土葬墓は日本人の居住域と考える場所に位置しており、日本人の墓と考えた。一方、住蕃貿易に従事した宋人達は、一一世紀後半には博多浜の東側（後の聖福寺）に堂舎を営み、埋葬されていたが（亀井一九八六）、一二世紀後半になると、宋商人の居住は東の日本人居住区全体に拡大し、混住状態が進むのと並行して、宋人墓地は都市外に移動し、跡地は「霊地」として宋人の管理化に置かれたと考えた。このように、博多浜での土葬墓の

分布を日本人の居住域とみなして、住民の住み分けを読み取るという分析を行った。その後の資料の増加によって、息浜の西側で陶磁器を副葬せず、土師器や和泉型瓦器碗を埋葬する土葬墓群が見つかり、それらに都市部の屋敷墓とは異なる階層の被葬者を想定し、息浜が新たに葬送の場として利用された可能性を指摘している（大庭一九九六）。また、一四世紀以降の埋葬遺構の減少について、墓を都市の外に出すという現象は実質的な都市化と都市的な自覚・機構整備が後追いされた結果であるとし、その後の葬送地は「松原」（箱崎・馬出・千代・堅粕）にあり、博多の聖地となったと推定している（大庭二〇〇二）。

大庭氏は博多の墓の変遷モデルは推論の段階で、まだ葬送の実態は不明な点が多いことを指摘している。この間、博多遺跡群の調査は進んでおり、あらためて埋葬遺構の変遷を整理してみたい。まず、大庭氏の分類案（大庭一九九二b・第8図）を参考に、埋葬遺構の形態を分類する。

●土葬墓

土坑墓A 長軸が短軸に対して際立つて長い長方形を呈する土坑（8図・3）。

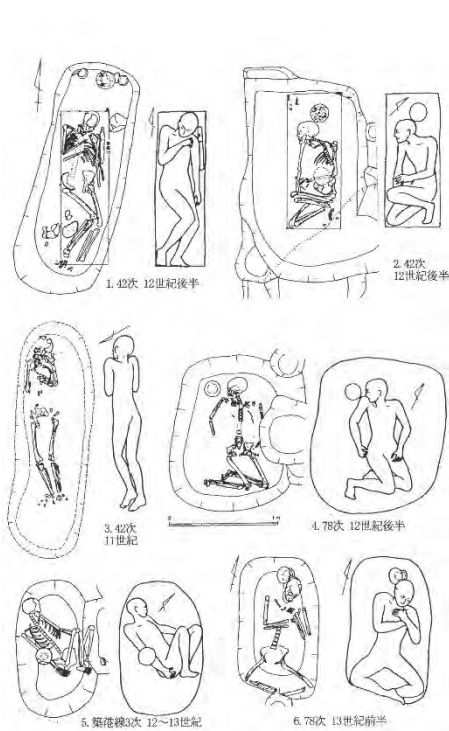
土坑墓B 小判型または不整円形を呈する土坑（8図・4）。

土坑墓C 円形もしくは楕円形の平面をもつ深い土坑（9図・1）。

座位の直葬か。木桶墓の可能性も。

配石土坑墓 隅丸長方形の土坑に帯状に敷石が見られるもの（9図・2）。

木棺墓A 隅丸長方形で棺の長さ一五〇cm以上の土坑（8図・2）。



第8図 博多遺跡群の土葬墓



第9図 博多遺跡群の埋葬遺構

第1表 博多の墓分類

墓形態	数	墓形態	数
土坑墓	147	土坑墓A	55
		土坑墓B	45
		土坑墓C	15
		配石土坑墓	6
		土坑墓(不明)	26
木棺墓	42	木棺墓A	19
		木棺墓B	17
		木棺墓(不明)	6
火葬墓	19	火葬墓	11
		火葬施設	8
その他	10	板組墓	1
		甕棺墓	1
		頭骨埋葬	5
		溝埋葬	2
		不明	2
石造物		五輪塔	44
		板碑	23
		宝篋印塔	10
		石塔	1

まず、古代・中世において当時の供養塔である石塔が出土した地点を見ると、聖福寺や櫛田神社、妙楽寺など寺社の門前に分布していることが分かる(第10図)。石塔は溝や包含層出土が多く時期を明確化することが難しいが、大庭氏の整理に従うと一四〜一六世紀に築造されたものと推測される。例えば、聖福寺北側の門前では築港線二次調査の遺構検出状況から、門前に石塔群や堂宇が並ぶ一四世紀前半の景観が復元されている(第11図)。戦乱が続いた一四世紀前半の博多の状況を反映したものではないかと推測されている(力武・大庭一九八八)。聖福寺門前南端の一七五号

火葬施設 土坑内で遺体を茶毘にふすもの(9図・6)。
 ●その他
 頭骨埋葬・廃棄 頭骨のみを土坑を掘って埋葬しているもの(9図・7)。頭骨のみが廃棄されているもの(9図・8)。
 人骨廃棄 人骨が溝や波打ち際のヘドロ層に廃棄されたもの(9図・9)。

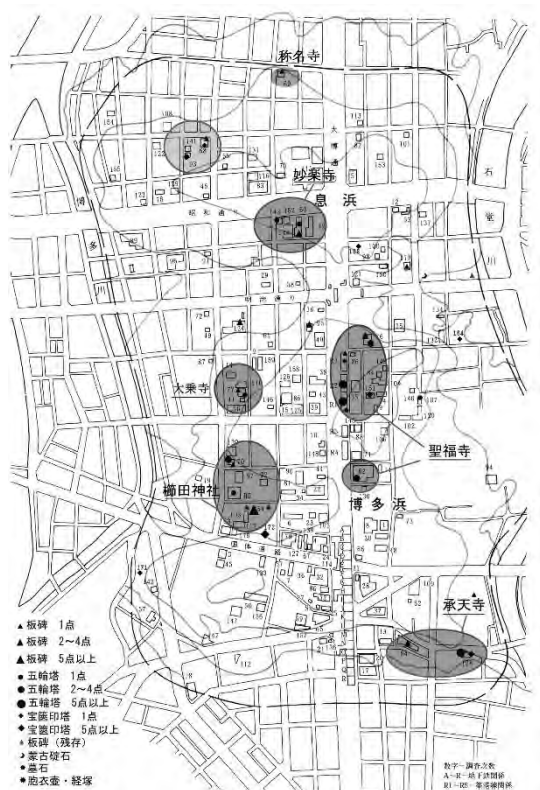
木棺墓B 隅丸長方形で棺の長さ一五〇cm以下の土坑(8図・2)。
 板組墓 木室・木廓状に作るもの(9図・3)。
 甕棺墓 陶器または瓦質の甕に人骨を埋葬するもの(9図・4)。
 ●火葬墓
 火葬墓 特定の形態はなく、楕円形や不整形の土坑に火葬骨が葬られるもの(9図・5)。



第 11 図 聖福寺門前の石塔・堂舎群

土坑が検出された地点の周辺では、石塔の出土はなく、一四世紀前半の景観は北側の門前とは異なっていたようである。

次に石塔を除く埋葬遺構の分布を時期



第 10 図 石塔出土地点の分布

別に見ていく。古代の状況(第 12 図)は、九世紀に博多浜の周辺部に墓が造られ、一〇世紀には墓が博多浜の中心部へと集まり始めている。この時期は、土坑墓が一般的で木棺墓は少ない。

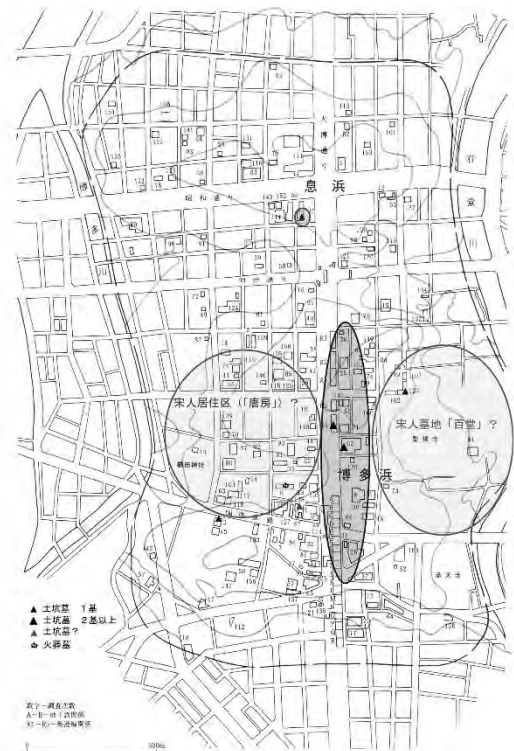
一一世紀(第 13 図)は都市・博多の成立期であるが、特に一一世紀後半に墓数が増加し、土坑墓が主流となる。墓域自体は一〇世紀とほとんど変わらず博多浜の中心部に営まれるものと、博多浜の東側に営まれるものがある。前者は、大庭氏の言う日本人の屋敷墓で、後者は「百堂」(宋人墓地)に存在することから宋人の墓とも考えられるが、副葬品を持たず、一般的な土坑墓であることから、宋人の墓の可能性は低いと考える。この時期、息浜の南側でも、人骨が見つかったているが、埋葬遺構を伴わず、俯臥位伸展葬で腕組をするという特異な状態で発見されたことから、墓とは見なせないと考えられている(大庭二〇〇二)。

一二世紀(第 14 図)になると、墓数はさらに増加し、土坑墓に加え、木棺墓が増加する。墓域は、博多浜の中央部、現在の大博通り沿いに広く分布する。また、息浜の一部にも墓域が点在する。宋人墓地が廃絶され、「空地」化していたとされる博多浜東側で墓は見つかっていない。また、墓は一般的に一基もしくは数基単位で見つからず、一一世紀からの屋敷墓的な性格は変わっていない。

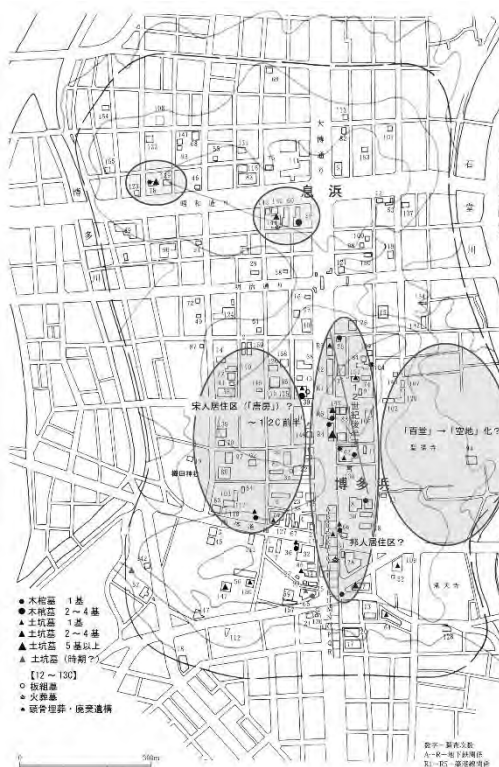
一三世紀(第 15 図)は、前半までは一二世紀とほぼ同じ状況である。後半に墓数が減少する一方、火葬墓・火葬遺構が博多浜中央部から南側に見られるようになる。息浜の墓域は、一部消滅するが、一二世紀と同様の場所にも見られる。一二世紀末創建の聖福寺、一三世紀半に創建された承天寺の門前に墓地が作られた状況が確認できる。



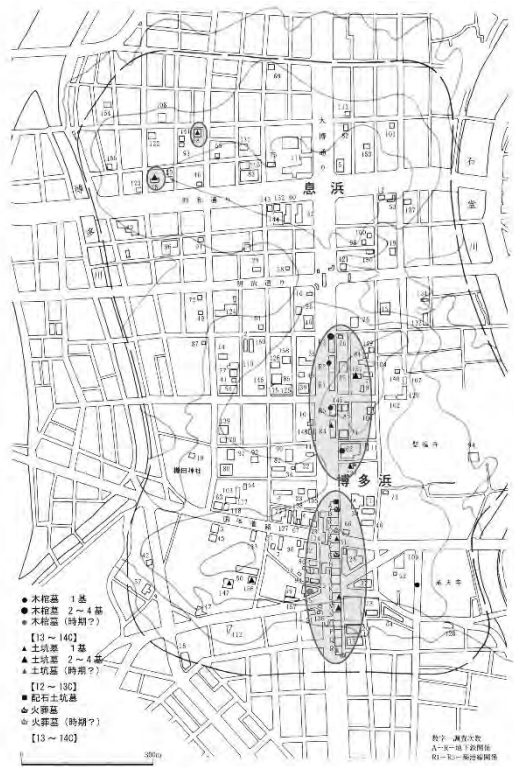
第 12 図 埋葬地の分布 (9~10 世紀)



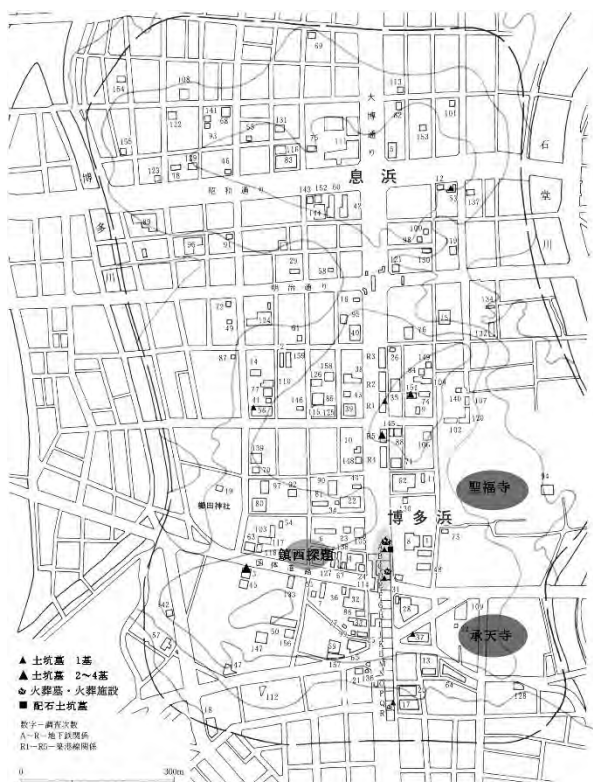
第 13 図 埋葬地の分布 (11 世紀)



第 14 図 埋葬地の分布 (12 世紀)



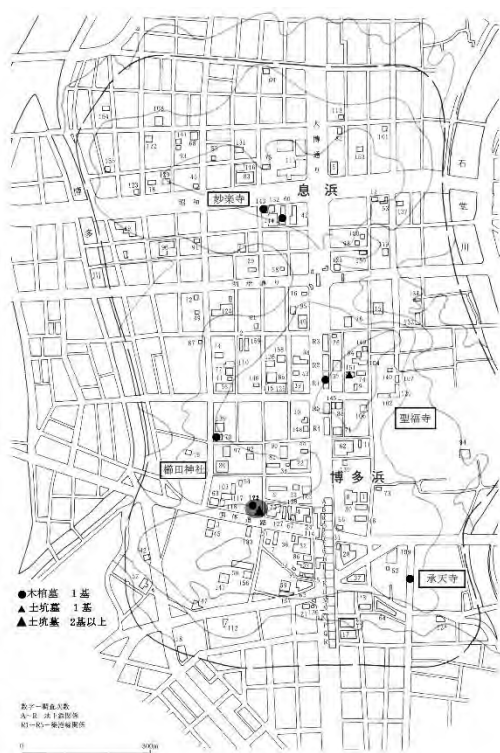
第 15 図 埋葬地の分布 (13 世紀)



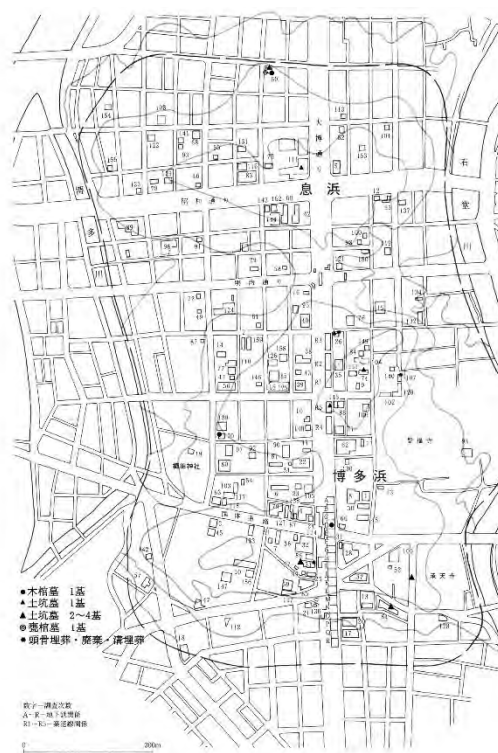
第 16 図 埋葬地の分布（14 世紀）

一四世紀（第16図）になると、埋葬遺構はさらに少なくなる。博多浜中央部の聖福寺前の墓域は大きく変わらないうが、墓は博多浜全体に分散する傾向がある。この時期に、五輪塔などの石塔群が造立されているが、その分布と墓の分布を重ね合わせると一致する部分が多く見られる。特に、聖福寺門前の南側と鎮西探題館推定地の間にある店屋町工区には、一七五号土坑・火葬頭骨集積遺構を含めて火葬墓と推定される遺構が一七件集中している。遺構の時期は一三世紀後半～一四世紀とみられ、当地が都市博多における火葬による埋葬地となっていたことが確認できる。

一五世紀（第17図）の埋葬遺構も少なく、木棺墓が主流になる。鎮西探題館の推定地にはこれまでなかった木棺墓や土坑墓が確



第 17 図 埋葬地の分布（15 世紀）



第 18 図 埋葬地の分布（16 世紀）

第2表 都市博多における埋葬遺構の変遷

時期	土葬墓				火葬墓		人骨	供養塔
	土坑墓	木棺墓	配石土坑墓	露棺墓	火葬墓	火葬施設	埋葬・廃棄	石塔
9C								
10C								
11C								
12C								
13C								
14C								
15C								
16C								
近世								

認められるようになる。鎮西探題館の周辺は元弘の乱による焼失（一二三三年）後、遺構は断絶し、再び生活遺構が確認されるのは一六世紀になる。この間の一五世紀には墓地が営まれるような場所になっていたと推測される。一六世紀（第18図）には埋葬遺構が増加し、再び土坑墓が増える傾向がある。

以上のような博多遺跡群における埋葬遺構の変遷を整理すると第2表のようになる。これを見ると一

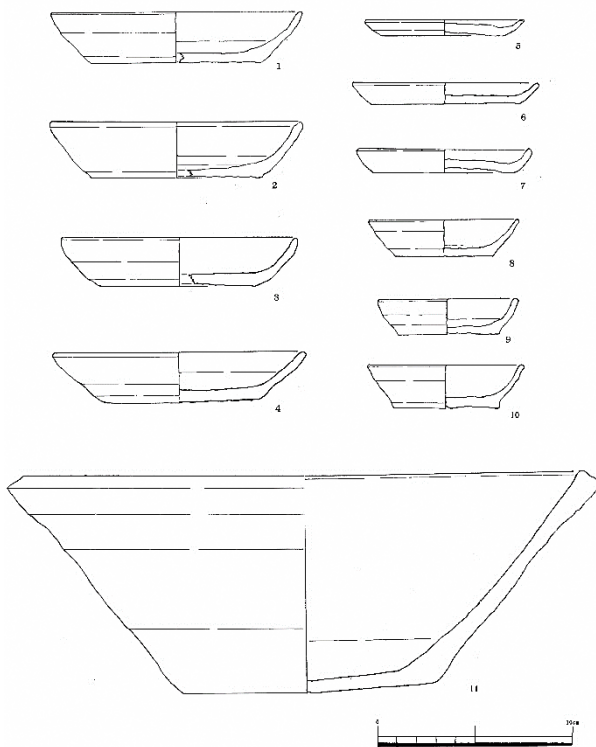
七五号土坑の時期にあたる一四世紀は、石塔が建てられ、火葬墓が卓越するなど埋葬遺構の過渡期にあったことが分かる。また、一七五号土坑のある聖福寺門前南側の店屋町工区周辺は、一二世紀から土坑墓などが作られる埋葬地であり、一三世紀後半～一四世紀に盛んに火葬墓が作られる場所となっていたが、一五世紀以後は埋葬地としての機能を失っていたことが確認できた。

よって、一〇〇体以上の遺体がこの場所で火葬・埋葬されたのは偶発的でなく、二百年以上にわたって埋葬地として機能していたという場所性に起因しており、必然的にこの場所で遺体の処理が行われたと考えたい。遺体を菊池一族のものと仮定した場合、近くの鎮西探題に攻め込み、犬射馬場に首が晒され、その近くの埋葬地で埋葬されたという自然な流れが想定できる。

三、一七五号土坑出土遺物の再検討

（一）土師器の年代観

まず、一七五号土坑出土の土師器類について未報告資料を含めて再検討する（二）。未報告資料は、陶磁器や土師器類など一部が福岡市埋蔵文化財センターに保管され、遺体に伴って出土した完形に近い土師器類は熊本県菊池市の菊地神社の資料館に移管されている。二〇一九年度に両者を調査予定だったが、新型コロナウイルス感染拡大のため同センターの資料しか調査ができなかった。本稿では、同センター保管資料のうち、遺体共伴と考えられる完形に近い土師器類を実測図とともに紹介し（第19図、第3表）、形態や年代観について検討する。



第19図 一七五号土坑出土未報告資料



第 20 図 一七五号土坑の土師器（未報告）



第 21 図 黒色物質が付着した土師器皿



第 22 図 火舎香炉（報告資料）



第 23 図 火舎香炉（未報告資料）

第 3 表 未報告資料詳細

遺物番号	器種	分類	口径	底径	器高	注記
1	土師器杯	杯 B 3 b	13	8.7	2.65	系切
2	土師器杯	杯 B 3 b	13	8.8	2.7	系切
3	土師器杯	杯 B 3 b	12.2	7.9	2.5	系切
4	土師器杯	杯 B 3 b	13	8.2	2.65	系切、2・3層混
5	土師器皿	皿 B II	8.2	6.2	0.8	系切、1層
6	土師器皿	皿 B I 2	9.6	7.6	1.1	系切、2層、黒煤
7	土師器皿	皿 B II	9	7	1.2	系切
8	土師器皿	皿 B III 1	7.8	5.1	1.9	系切、2・3層混、黒煤
9	土師器皿	皿 B III 1	7.9	5.2	1.85	系切、3層
10	土師器皿	皿 B III 1	7.8	5.6	2.25	系切、2層、黒煤
11	瓦質すり鉢	A 類	28.5	13	11.5	

年代推定の根拠となる土師器杯・皿は、報告資料（第 3 図）を含めて、楠瀬編年の杯 B 3 b（3 図・2）、皿 B II（19 図・5・7）、皿 B I 2（19 図・6）、皿 B III 1（3 図・1、19 図・8・10）が出土している。形態およびセット関係で楠瀬編年のマ a 期（一四世紀前半）にあたる。皿 B III 1 はそれまで一般的だった糸切りの皿 B I に比べて器高が高い器形である。一四世紀初期と考えられる遺構からは出土せず、一四世紀中期～後期の遺構に見られる。この

ような傾向から一七五号土坑は、一四世紀中期に近い時期の遺構と考えられ、『博多日記』記載の菊池合戦の年次・元弘三年（一三三三）の年代観とも矛盾しない。

また、土師器の中には、他の皿・杯と異なり、焼け焦げたタール状の黒色物質が全面にこびりついた完形品が十数点存在する（第 20 図）。黒色物質は焼成時に付着する黒班や灯明皿のような形で付くものとは明らかに異なり、器全体に付着している（第 21 図）。土師器が供膳具として人骨とともに置かれ、火葬によって付着したものと考えてみたい。

（二）火舎香炉の再検討

火葬すなわち埋葬が行われたという仮説を補強する遺物として、一七五号土坑で出土している完形の赤褐色の土師質火舎に着目したい（第 22 図）。やや張り出した筒状の器形で、中央に装飾した段を

持つ構造である。下部は破損しているが、器高はそれほど高くなく、筒形で底部は穴が空いているのではないかと推測される。側面に穴を穿ち、大きめの菊花紋のスタンプを三つセットで押している。全体に焼け焦げた煤が付着しており、内部に鉄くずのような黒褐色の付着物が見られる。

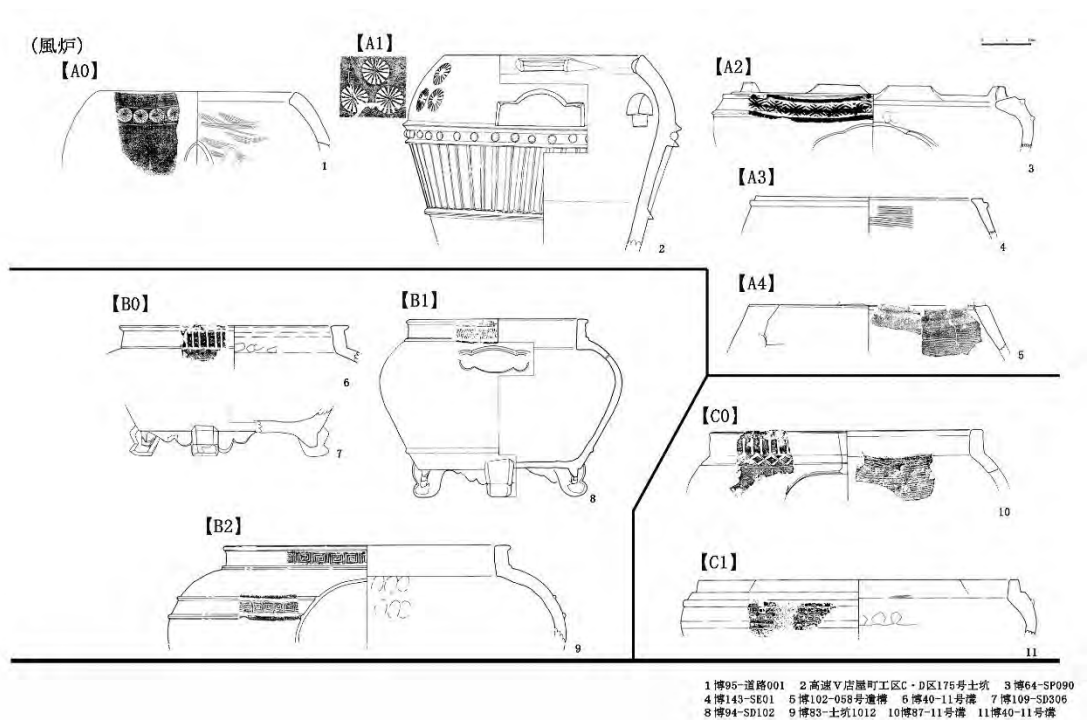
未報告資料を調査すると、完形でなく破片だが、報告資料とほぼ同じ器形の火舎がもう一点出土している。段の形状は同じだがその下の装飾が少し異なっている。焼成も報告資料とは異なり、瓦質に焼かれている。報告資料ほどではないが、黒い煤が付着している(第23図)。

形状は、博多遺跡群で出土する喫茶用具の風炉に類似しているが、いわゆる火舎と呼ばれる仏用具の小型香炉とも器形を異にしている。そこで、まず博多遺跡群内で出土した風炉・香炉を集成し、分類・編年を行い(三)、遺物の位置付けを確認する。

【風炉の分類】

風炉と推測される土器は三七点が報告されている(二〇〇七年度報告分まで)。瓦質がほとんどであるが、土師質のものも少数存在する。法量が非常に大きいため、全体が知れるような資料はほとんど出土していないが、体部に円形や三葉形の窓を持ち、頸部や体部にスタンプ文が施文される。風炉の場合、底部や胴部のみが出土しても、風炉と断定することが困難であり、類似した資料を仮に風炉と推定して三タイプ一〇種類に分類した(第24図)。一七五号土坑出土の火舎も仮に風炉として分類している。

● **A類** 口縁部が内湾するタイプ。器肉が厚く肥圧せずに大きく内湾し端部は平坦なもの(A0)、器肉が厚く肥圧せずに大きく内湾し



第 24 図 風炉の分類試案

端部に丸みを持ち、口縁部下に二つの突帯をもつもの（A1）、口縁部が内側に強く肥圧して上面に平坦面を持ち、口縁部外側に二つの突帯をもつもの（A2）、口縁部が内側に強く肥圧して上面に平坦面を持ち、口縁部外側に1つの突帯をもつもの（A3）、口縁部は内傾して、口縁上面に平坦面をもつもの（A4）がある。A1類の底部は、豊前地域と同様獣脚をもつものと推測される（佐藤二〇〇六）。スタンブ文を残す資料は報告されていない。A0類も、口縁部や形態に大きな差異は見られないことからA1類と同様の胴部・底部を持つものと推測される。スタンブ文には、菊花文（小）が見られるが、無文のものもある。A2類のスタンブ文は、袈裟襷文を二条突帯間に施文する。A3類のスタンブ文は、突帯間に蓮子文などが施文される。A4類・A5類は無文である。A3類・A4類の底部形態は資料が無く、不明である。調整技法に関しては、A1・2類が指押さえ・ミガキ（若干の刷毛目調整を加えるものも見られる）で内面を調整するのに対し、A0類・A3類・A4類・A5類は内面全体が横方向の刷毛目調整であるという相違が見られる。

●**B類** 頸部が短く口縁部が直立して外方にやや突出する。体部は球形で、全体に壺形態をなす。口縁部の外方への突出が大きく、頸部の付根に突帯を持たないもの（B0）、口縁部の外方への突出は小さく、頸部の付根に突帯を持ち、頸部がやや長く、蓮子文を施文するもの（B1）、口縁・頸部の形態はB1類とほとんど変わらないが、頸部がややB1類より短いもの（B2）がある。B1類は一段筒状に下がつて精巧な獣脚を持ち、B0類・B2類は底部がそのまま平底になり精巧な獣脚をもつ。B1類とはほぼ同タイプで頸部がやや長めで内傾し、口縁部の処理が甘いもの（B3）は、博多遺跡群では

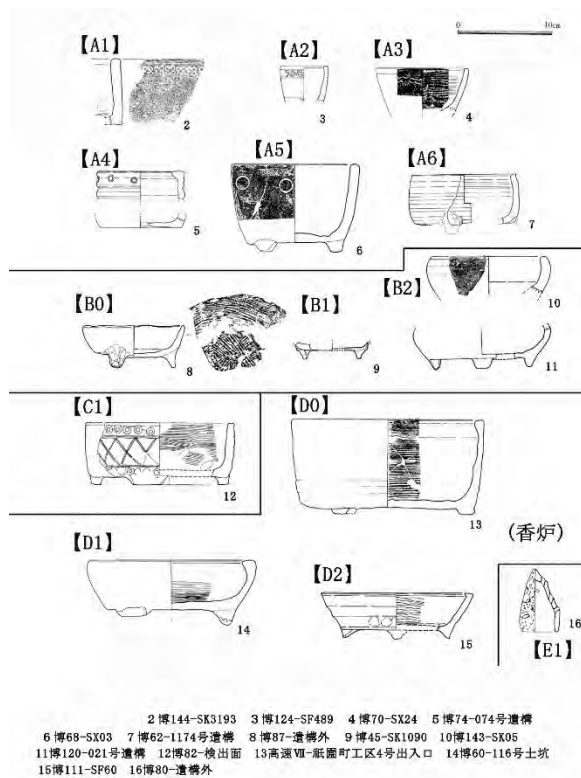
報告されていない。B0類のスタンブ文は、頸部に蓮子文、肩部に斜格子菱形文を施文する。B1類のスタンブ文は、頸部に蓮子文を施文するが、底部は出土しておらず不明である。B2類は、無文のもの、頸部に雷文、S字状文、斜格子菱形文を単体で施文するもの、雷文・斜格子菱形文、列点多重菱形文・斜格子菱形文、列点多重菱形文・蓮子文、雷文・蓮子文、菊花文・蓮子文を上下二列に施文するものがある。胴部に二条突帯を持ち、間に雷文を施文するものもある。

●**C類** 直立する短い頸部を持ち、体部は肩が大きく張る無形壺形のもの。底部の形態は不明である。頸部（蓮子文）、肩部下（菱形文）にスタンブ文が施文され、突帯を持たないもの（C1）、頸部には施文されず、肩部に突帯を持ち、その下にスタンブ文（雷文（上・下））が施文されるもの（C2）がある。

【香炉の分類】

香炉と推測される土器は三一点報告されている（二〇一四年度報告分まで）。小型のものからやや大型のものまで見られる。口径二〇cm前後の大型のものは、火鉢と同様の形態をしているものもあり、暖房具としての用途も担ったと考えられる（第25図）。

●**A類** 小型品で器高はやや高い。体部と底部の境が直角に近く屈曲し、外面にスタンブ文（梅花文、亀甲文）を施文するもの（A1）、やや筒状を呈し、体部に三条の沈線を巡らせ、その間にスタンブ文（梅花文）を施文するもの（A2）、坏状を呈し、外面に一条沈線を巡らし、その下にスタンブ文（爪形文（上・下））を施すもの（A3）、口縁部が内側に肥厚し、体部下半に段を持ち、口縁部下にスタンブ文（円形刺突文）が施文されるもの（A4）、体部はやや外傾して筒



第25図 香炉の分類試案

状を呈し、三つの脚を持つもの（体部にスタンプ文（輪状文、楓・唐草文）を持つものと持たないもの、大・小のバリエーション）（A5）、口縁部がやや内傾して筒状を呈し、無文で、外面にロクロ目を強く残すもの（A6）がある。

●B類 体部と底部の境が丸みを持つもの。体部は外傾し、無文のもの（B0）、外面にスタンプ文を有し、小さな脚が着く非常に小型のもの（B1）、形態はB1類と変わらないが、B1類より大きいもの、口縁部下に一条沈線を巡らし、その下にスタンプ文（菊花文（小））が施文される。底部形態は獸脚を持つ大型のものと普通の三脚の小型のものがあると考えられる（B2）。形態はB1・B2類と同様で球胴状、さらに大型で体部下にスタンプ文（雲文）を持ち、胴部

第4表 香炉・風炉の年代観

分類	個別 点数	形態別 点数	器種別 点数	時期						
				12世紀	13世紀	14世紀	15世紀	16世紀	17世紀	18世紀
香炉	A	1	2							
		2	1							
		3	1							
		4	1							
		5	7							
		6	1							
	B	0	2							
		1	1							
		2	4							
		3	1							
	C	1	1							
風炉	A	0	2							
		1	1							
		2	6							
		3	1							
		4	2							
		0	2							
	B	1	3							
		2	14							
		1	1							
		2	1							

分類した遺物の年代を土師器や陶磁器などの共伴遺物から推測したものが第4表である。香炉の中には、一七五号土坑の火舎香炉（A1）と類似する遺物は出土しない。一方、報告書等で風炉と分類される遺物の中には、A1と上部形態が類似したA0が一二・一三世紀から見られる。しかし、A1と同

に窓をもつもの（B3）もあるが、火鉢としての用途も考えられる。

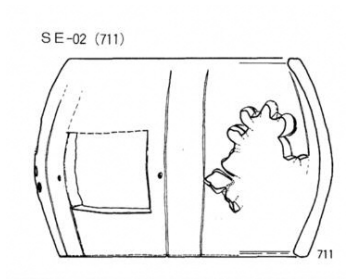
●C類 口径が20cmに近い大型品で、器高はA類より浅く、体部は直立し、体部と底部の境は直角に近く脚を持つ。スタンプ文（二重円文（上）・三角文（中）・二重円文（下））を施文するもの（C1）がある。無文のもの（C0）は報告されていない。

●D類 口縁部を内側に折り曲げるもの。内側に少しだけ肥圧し、無文のもの（D0）、三角状に内側に肥厚するもの（D1）、浅鉢同様に大きく肥圧させるもの（D2）がある。スタンプ文は、基本的には施文されないようだが、D2類に長方形文（上・下）が口縁下に施文される例がある。

●E類 陶製・銅製の博山炉の土製模倣品。全体にいくつも穴が開く（E1）。



第 26 図 火舎香炉



第 27 図 金剛峯寺出土火舎

じ器形のものは他の調査区では1点も出土しておらず、非常に特殊な遺物であることが分かる。またそうした特殊な遺物が未報告資料を含めて2点出土していることから、喫茶用具としてでなく別の用途が想定される。

本稿では、このことから形状も特異で装飾性の高いA1は、風炉でなく香炉として使用されたものではないかと推測する。その根拠として、密教寺院（真言宗）で中世に流行した側部に段を伴い、穴を開けた金属製の火舎香炉（第26図、鎌倉時代、国重要文化財、奈良国立博物館所蔵）が上げられる。法量は高さ、口径ともA1が金属製より大きい、側面に段を持つ構造や穴の穿ち方などからA1は金属製品の模倣品ではないかと推論したい。金属製品の模倣の土器であるため、特殊な器形や装飾が施され、他にも出土例がないのではない。火舎香炉は密教系の真言宗寺院で使われる法具である。形状は異なるが、類似した筒状の瓦質の火舎が真言宗の本山である高野山の金剛峯寺遺跡からも出土している（第27図）。

中世博多の真言宗寺院といえ、当時は大水道（呉服町）にあつ

た東長寺が上げられる。想像をたくましくすれば、真言宗の僧によつて処刑された菊池一族の供養の法要が行われ、火舎香炉が香を焚く法具として使用され、供膳具として使われた土師器杯・皿とともに、遺体の火葬時に廃棄された可能性を指摘したい。なお、菊池武時の法号「寂阿」は念仏者に帰依した阿弥陀号であり、時衆に帰依して法号を授かったとされている（桃崎二〇一三）。また、武時の子とされる菊池氏一五代・武光は、菊池五山を設定するなど禪宗の保護につとめ、菊池氏の菩提寺は臨済宗の正観寺である。真言宗と菊池氏の関係は判然とせず、前記は推論の域を出ない。

四、『博多日記』と一七五号土坑

ここでは、一七五号土坑・火葬頭骨集積遺構を菊池一族の埋葬遺構と仮定して、遺体処理や供養の可能性を『博多日記』の記述から探る。

まず、遺体処置の過程をあらためて確認する。『博多日記』には、「合戦過テ（中略）即菊池入道子息三郎寂阿舎弟覚勝頸以下若党等頸被懸犬射馬場」とあり、元弘三年三月一三日、鎮西探題で討ち取られた菊池一族七〇人の多くはすぐに首をはねられ、犬射馬場に首を晒されたようである。その処置は迅速で、大庭氏が指摘するように、犬射馬場は市が立ち、人が大勢集まる場所であり、首を晒す場として定着していた可能性がある（大庭二〇一九）。次に「寂阿三郎覚勝三人力頸ハ、始四五日ハ不被懸、後二被懸之、寂阿並子息三郎覚勝頸ハ、別ニ被懸之、夜ハ取テ被置御所」とあり、武時と息子の三郎、弟の覚勝の首は、若党らとは別の場所に懸けられ、しかも四・五日後の一七、一八日ごろに晒された。さらに、高名な武将である



第 28 図 鎮西探題を攻める菊池武時

きて大射馬場に懸けられており、首は同時でなく段階的に懸けられたことが分かる。首が晒されている間、処刑された胴体は別置されていたものと推測される。遺体の腐臭などを考えれば、首を斬られた後に一七五号土坑が掘られ、胴体が投げ入れられていた可能性も考えられる。後から運ばれてきた落人の遺体は首だけであり、探題で討ち死にした七〇人余（またはその一部）の胴体が土坑に入れたと考えたい。「其後亦連々二自所々取進落人頸二百餘也」とあり、最終的にさらされた首は二〇〇余となっている。この首と胴体の別置や処理の時間差が、両遺構が近接する場所ではなく、少し離れた位置関係になり、別々の処理となった理由かもしれない。

ためか、武時らの首が取られる可能性を怖れて探題に持ち帰っている。続いて、「十ヶ日計アリテ、以釘被打付、札銘ニ云、謀叛人等頸事、菊池二郎入道寂阿、子息三郎寂阿舍弟二郎三郎入道覚勝云々」とあり、さらに十日後の二七、二八日ごろには、謀反人とし名前入りの木札が首に懸けられた。この間、戦場から逃げた落人らが討ち取られ、首が送られて

次に『博多日記』の後段四月分の記述を見る。

「一 或人ノ従女、去四日懸置頸ヲ見ニ行テ見程ニ、身毛ヨタチ覚ケルカ、ヤカテ勞ヲ付ケリ、カヽル程ニ或僧一兩人、彼家主許ニ行、對面シケル時、彼従女勞シケルカ、ヲキアカリ、男ノ風情シテ、アフキ取ナヲシ、僧ニ向、色代シケリ、僧ヲ上ニ請シ、下ニ坐シテ、カシコマリケル間、彼僧アヤシミテ問云、何ナル人ニテ御坐スルソト尋ケレハ、答テ云、我ハ菊池入道ノ甥ニ左衛門三郎ト申者也、童名菊一トテ、有智山ニテ児ニテ候シ、人皆知テ候、但菊池ニテ新妻ヲ迎テ十六日ト申時、菊池ヲ罷出候シ時、相構今度ノ合戦ニ無別事シテ、返テ二度見タテマツラハヤト申候シカハ、彼妻モ涙ヲ流シ、ハカマヲキ候シ時、ハカマコシヲアテゝ候シ面景、于今不忘、我ヒタイノカミヲ切テ、彼妻女ニトラセ、彼ノ妻ノ髪ヲハ、我マホリニ入テ頸ニカケ、大射馬場ニテ死候シ時マテ、持テ候シトカタリ申テ、涙ヲ流ケリ、但敵ヲトラテ死タルコソ口惜ケレト申ケリ、妻女ノ事ヲ、申出時ハ、哀傷ノ気色ヲ顯シテ、涙ヲ流シ、合戦ノ事ヲ申出時ハイカレル色ヲ顯ス、又申云ク、我カ息濱ヲ打出シ時、夜フケルマテ、酒ヲノミ、水ノホシク候シヲ、吞スシテ打出テ死テ候間、水カホシク候トテ、水ヲコヒ、小桶ノ二桶ノミケリ又我ハシヤウコニテ候、酒ノミ候ハントテ、酒ヲ提ノ一提ノミケリ、水ヲノマスシテ死テ候シ間、我ニハ常ニ水ヲマツリテ給候、又後世ヲ訪テ給候ヘト、彼僧達ニ語申ケリ、其又式日僧申云、カヽル□弱ノ女性ノ許ニ、御ワタリ候ハ、タカイ候ト申ケレハ、家ヲモタス候テ、如此候ト申ケレハ、家ヲツクリテマイラセ候ハント申テ、率都婆ヲ作テ、松原ニ

立二行ケレハ、御共可仕ト申テ、タフレフシテ、シハシアテ、ヲキアカリ、彼勞サメ、又殊ニ漢字ヲカク時、我名ヲソトハニカヽレ候ハヌト申ケレハ、ヤカテ名字ヲソトハニカキテ立ケリ」

要約すると、「ある侍女が、四月四日に犬射馬場に懸けられている菊池勢の首を見物に行ったところ、身の毛がよだち、やがて菊池武時の甥・左衛門三郎の霊に取り憑かれて寝込んでしまった」という話である。傍線①にあるように四月四日の段階でまだ首が犬射馬場に掛けられていることが記されていて、首級は三月一三日ごろから二〇日以上晒されていることになる。すなわち四月四日の段階ではまだ首級の埋葬は行われていない。

また、傍線②を要約すると、「ある僧たちが、卒塔婆を作って博多の松原に立てに行こうとすると、侍女に取り憑いていた菊池左衛門三郎の霊がいなくなり、侍女は正氣に戻った。僧たちは卒塔婆に菊池の苗字を書いて松原に立てた」と記されている。菊池一族の供養が、都市外の葬地となっていた松原で行われている。すなわち、菊池一族はただ火葬されて埋葬されただけでなく、僧によって供養されていたのである。また、侍女が取り憑かれている状況や火葬・埋葬の記載がないことから、供養や胴体の火葬処理はまだ行われていないものと推測される。卒塔婆を立てて供養を行った二重傍線部の「或僧一兩人」が誰なのか。筆者の僧・良覚がこの動乱時に聞いた話であるから、寄宿していた承天寺の僧かもしれないし、前章で供養をしたと推測した東長寺の僧かもしれない。

『博多日記』の記述は四月初旬までしか残されていないため、この後の菊池一族の首級がどうなったか経緯は分からない。しかし、『博多日記』によって宗教者が菊池一族の供養を行ったことは確認

できたのであり、その後菊池一族全員の埋葬にもなって、供養の法要を行った可能性は高いと考える。火葬頭骨集積遺構には共伴遺物はないが、一七五号土坑には完形の土師器や銅銭、上部がほぼ残存した火舎香炉が人骨の焼土層と共伴して出土しており、その上に配石を配する形で墓の形が取られている。すなわち、遺体の供養は供物や香台、焼香台などを伴った法要の形で行われ、その後石を配して丁重に埋葬されたと想定したい。

おわりに

本稿では一七五号土坑・火葬頭骨集積遺構の立地や出土遺物、『博多日記』の記載との整合性から、両遺構と菊池一族の処刑との関係と、埋葬された人々の供養が行われたのかどうかを検討してきた。その結果、菊池一族の埋葬地と断定する論拠はないが、状況として遺構と『博多日記』の記載が符合する点が非常に多いことが改めて確認できた。

まず、大量の頭骨が埋葬された遺跡は都市博多内で両遺構のみであり、菊池一族の埋葬地として現状唯一の推定地であることが確認できた。両遺構の所在する場所は一二世紀以降、埋葬地として使われており、一三〜一四世紀には周辺に両遺構以外にも多くの火葬墓が存在していることが明らかとなった。近接する鎮西探題で合戦が行われた経緯からも、当地が必然的に埋葬地となった可能性が高いことを指摘した。さらに、一七五号土坑は共伴する未報告の土師器のセット関係や形態から一四世紀前半でも中頃に近い時期で、『博多日記』の記載された時期に形成されたものであることを裏付けた。また、『博多日記』の経過を追うと、菊池一族の首だけが長く晒され、

胴体はどこかに別置された可能性があり、頭骨と胴体が少し離れた両遺構で別々に火葬されている事実と符合していることも確認できた。すなわち、両遺構を菊池一族の埋葬地として推定する論拠はさらに増えたと言える。

『博多日記』には、謀反人として首を晒された菊池一族が、宗教者によってその霊を鎮めるために丁重に祀られていた事実が記されている。一七五号土坑における遺体の供養については、法要の道具と考えられる特殊な火舎香炉や供膳具とみられる完系の土師器の存在から、供養法要が執り行われたと推測した。このことから、遺構が菊池一族に関係したものであれば、その遺体は謀反人として打ち棄てられて焼かれたのではなく、丁重に供養・埋葬されたと考えたい。

福岡市内には、中央区六本松と福岡大学キャンパス内にある菊池武時の首塚や、東油山五丁目にある武時家臣・赤塚殿が力尽きた場所と伝わる碑、菊池氏の武将が自刃した場所と伝わる南片江二丁目の花立地藏（首切地藏）など、菊池合戦に関わった菊池一族やその家臣に関わる伝承や史跡が多く残されている（桃崎二〇一六）。これらは討ち死にした菊池一族に対する地域の人々の供養の心から生まれたものであったと推測したい。その原点は一七五号土坑での菊池一族の供養にあったのかもしれない。

注

（一）築港線、高速鉄道に伴う調査を含む二〇一四年までの博多遺跡群の調査報告書を対象に埋葬遺構の集成作業を行っている。遺構の年代観は、共伴する土師器および陶磁器の年代を総合して判断した。

（二）土師器杯・皿は楠瀬二〇〇七、すり鉢は楠瀬二〇〇九を元に分類し、年代を推定した。

（三）北九州の大興善寺出土遺物を元にした分類案（佐藤二〇〇六）を元に博多遺跡群の出土遺物を分類した。分類・編年案は、二〇〇七年に筆者が九州大学に提出した卒業論文「中世博多における土器の生産と流通」の第1章第2節（3）「日用雑器類から見た中世博多の土器様相―荘厳具・調度具を中心として」を元に作成した。

参考文献

- 折尾学・池崎譲治・森本朝子・林田憲三 一九八六 『高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告書』 福岡市埋蔵文化財調査報告書一二六集
- 富岡直人・坂上和弘・江川達也・足立望 二〇一七 「博多遺跡群店屋町工区出土中世焼人骨の研究」 『市史研究ふくおか』一二
- 永井昌文 一九八六 「祇園町遺跡D区出土人骨群」 『高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告書』 福岡市埋蔵文化財調査報告書一二六集
- 楠瀬慶太 二〇〇七 「土師器食膳具から見た中世博多の土器様相」 『九州考古学』八二
- 桃崎祐輔 二〇一三 「地域の遺跡・寺社・石塔から見た城南区の歴史」 『城南区の歴史散策』
- 折尾学 一九八八 「菊池一族の首級か」 『よみがえる中世―東アジアの国際都市博多』 平凡社
- 川添昭二 一九六六 『菊池武光』 人物往来社
- 森茂暁 二〇〇六 「博多日記」の文芸性と九州の元弘の乱 『福岡大学人文論叢』三七―四
- 大庭康時 二〇一九 「博多日記の考古学」 『博多の考古学』 高志書院

- 佐藤鉄太郎 二〇〇九 「鎌倉時代に形成されていた博多の都市の復元」
『中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要』四一
- 池崎譲二・本田浩二郎 二〇一〇 『博多一三五』 福岡市埋蔵文化財調査
報告書第一〇八六集
- 大庭康時 一九九二a 「博多遺跡群の埋葬遺構について」 『博多研究会
誌』一
- 大庭康時 一九九二b 「中世葬送の一例」 『博多研究会誌』一
- 大庭康時 一九九六 「中世博多の縁辺」 『博多研究会誌』四
- 大庭康時 二〇〇一 「博多綱首の時代」 『歴史学研究』七五六
- 大庭康時 二〇〇二 「都市『博多』の葬送」 『中世都市鎌倉と死の世界』
高志書院
- 亀井明德 一九八六 『日本貿易陶磁史の研究』 同朋舎
- 力武卓治・大庭康時 一九八八 『都市計画道路博多駅築港線関係埋蔵文化
財調査報告(Ⅲ)』 福岡市埋蔵文化財調査報告書一八四集
- 楠瀬慶太 二〇〇九 「日用雑器類から見た中世博多の土器様相」 『中近
世土器の基礎研究』二二一
- 佐藤浩司 二〇〇六 「スタンプ文を有する瓦質土器の展開」 『陶磁器の
社会史』吉岡康暢先生古希記念論集
- 上田秀夫・黒石哲夫 一九九〇 『金剛峯寺遺跡発掘調査概報―紀陽銀行高
野山支店新築工事に伴う発掘調査』和歌山県埋蔵文化財センター

挿図出典

- 第1・2・3図 折尾ほか一九八六より転載
- 第4図 大庭二〇一九を一部改編
- 第5図 佐藤二〇〇九を一部改編

- 第8図 大庭一九九二bより転載
- 第11図 大庭一九九二aより転載
- 第25図 奈良国立博物館Hpより転載
- 第26図 上田ほか一九九〇より転載
- 第27図 『筑前名所図会』(福岡市立博物館所蔵)より転載